

巻頭言 新しい「暮らし」像を求めて

小木曾 洋司

（中京大学・地域と協同の研究センター理事）



これからやってくる社会とはどういうものでしょうか？このような問いかけをするのは、研究上の必要からではない。そのような問いかけを引き起こすものは将来に対する不安であり、しかもそれはますます大きくなっているからである。福島原発事故による放射能のように見えないが、確実に拡散しているように思う。

この不安の大本は社会の制度・非制度上のセーフティネットが壊れてきたところにある。戦後、社会保障制度は家族を形成することを前提にして組み立てられてきた。しかし、その家族の内容は大きく変容している。統計データによって生涯未婚率（50歳時点での未婚率）をみると男性で約20%、女性で約10%に達している。1990年代半ばに、日本的経営が放棄され、規制緩和が弾力的雇用のための非正規雇用を増加させてきた。そのため、「ワーキング・プア」と言われる低所得者層が増加し、男性に結婚できない層が堆積してきたのである。そのような推移の中で、職場での男女関係、夫婦関係が性別役割から水平で自由なものになっていくなら、結婚や家族の形成に多様な意味が生まれるかもしれない。しかしそうはなっていない。家族がもてない、あるいは、職を失った中高年男性は、家族や職場以外のつき合いを知らないために、SOSを出すことを知らない、あるいはプライドがSOSを出すことにためらわすことによって「孤立死」の可能性が高まる。また実際そのようなケースの「孤立死」のケースが報告されている。だから「孤立死」は今までとは異なるつながりや新しい絆を社会の中に形成することを要請していることを意味する。

閉じた家族や職場のつながりを戦後の高度成長はそのシステムとして形成してきたのであるが、そこから新しいつながりを紡ぎださなければならない。その過程で家族も新たな意味と形を見出せるだろう。

新しいつながりをどう見出して紡ぐのか、一つは地域社会という舞台であろう。地域社会の再生とかコミュニティの再生という言葉がよく聞かれるようになったが、その背景には少子高齢化の進展がある。日本の総人口は2005年を頂点に減少へと向かい始めており、今後も徐々に減少していくことが推測されている。2005年から10年前の1995年には、15歳から64歳の生産年齢人口、言わば「現役世代」の実数が頂点を迎え、その後減少している。数十年後には生産年齢人口より高齢者と年少人口を合わせた数が上回っていくと予想されている。つまり地域社会で生活する人々がますます増加する。その上、世帯類型では「単独世帯」が最大になるのである。そこで新たな住まい方や人間関係が紡ぎだされざるをえない。たとえば、「グループホーム」を「福祉的施設」と考える必要はないだろう。新たな家族、新たな住まい方、暮らしの形、そのようなものとして創造することが求められているのではないか。そこにはケアされる側とケアする側の固定的な関係性を超えるヒントがあるかもしれない。

「コミュニティの再生」は政策課題としては、国家に代わる社会的サービスの供給主体を求めている側面が強いと思う。その背後には新自由主義の自己責任論がある。湯浅誠の著書『反貧困』岩波新書、2008）を読むとその自己責任論はとくに若者に浸透しているようである。自己責任論の浸透は問題が社会に出ないように作用する。だからお互いを知らないということになる。関係を紡ぐとはお互いを知ることであり、関わりあうことである。そのことをここではコミュニティの再生と言いたい。つまり自己責任論を超えた新しいセーフティネットとしての地域社会の形成という意味で考えたい。そのためには、象徴的に言えば、若者をどう担い手として引き込むかが真剣に考えられなければならない。震災にかかわって若者のボランティアが大々的にメディアに流れる。若者もそのような極限状態において役に立っているという実感があるからであろう。（2pへ続く）

しかし、非常時でなくとも地域社会にはそのような助けを必要としている人々は同じようにいる。

貧困研究者である阿部彩は、「電気やガスが使えない人、医療サービスが受けられない人、さらには、地べたに段ボール1枚で寝ることを余儀なくされている人、そしてそのような状態から将来生活が好転する見通しのまったく立たない人……。その数は数万人ではすまない」と指摘した後で、「東北の被災者に対してあたたかいまなざしをと支援を送り続ける人々は、貧困に苦しむ人に対しては、まったく異なるまなざしを向ける。それは無関心なまなざしであったり、あからさまな非難であったりする」と述べている（『弱者の居場所がない社会』講談社、2011）。若者は非難される側でもあり、また自己責任論を強く持ち、貧困に陥った自分も含めた人々を非難のまなざしで見ているかもしれない。それはかれらが日常的には社会的に排除されているということである。地域社会にはそうした様々な人々がいるということが発見されなければならない。つまり出会わなければならない。そうした契機をどうつくるか。さまざまな活動主体が見出せるだろう。

町内会・自治会、NPOや協同組合など、いわゆる地縁組織と言われるものから市民組織と言われるものまでさまざまなある。地域の再生という大きな課題を掲げると組織率とか加入率という基準を用いたくなるようであるが、お互いに知るといふ観点から言えば、コミュニケーションをとること自体が大切なのであって、その基本は「聞く」ことであり、短くとも時間を一緒に過ごすことである。そうしたパーソナルな関係があつてこそ問題の連鎖（ニーズの構造）に接近できるのではないだろうか。それが新しい「暮らし」の像を描く方法であり、その地道なつながりづくりが暮らしの支えづくりであるように思うのである。



101号記念 特集 協同っていいかも

研究センターニュース100号に引き続き、「協同っていいかも」特集です。11名の会員から寄せられた思いをご紹介します。（五十音順）

面と向かい協同して考えていくことが大事

荒井 聡（岐阜大学）

子育てに励んでいた若かりし頃、集合住宅に居住する同世代が中心となり生協班ができた。子のために安心できる商品を手に入れたいの想いからであった。班での同世代の交流は気兼ねすることも少なく、家族ぐるみのつきあいまでに発展した。協同のよさを実感した。

こういうフラットな横のつながりから寄せられる声は貴重である。こうした声を、組織が吸い上げ、縦のつながりのなかで商品生産・流通の現場の改善などへとつなげる。それが安全で安心できる商品の開発につながる。また、組合員の志向が環境保護、平和、福祉などにも及

んでくれば、地域社会の持続的発展への貢献にまで広がる。

市場経済には、共同体を崩壊させ、競争により人々のつながりを遮断し、ばらける個人を生み出す本性があるという。生活者の視点からすれば、この延長線上にある社会は歪んだものに映る。市場経済の効率性を生かしつつ、そこから発生する様々な歪み（格差・貧困・環境破壊……）をいかに正すか、それには人々が面と向かい協同して考えていくことが大事である。

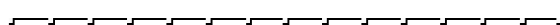


当たり前の「おたがいさま」 伊藤佐記子（コープぎふ くらしたすけあいの会）

震災・原発問題が加わったこの一年間の現況の中でみた「無縁社会」の放映は、なお一層考えさせられる諸問題が提起されていると思われました。今かかわっている「くらしたすけあいの会」でみえているひとりひとりのくらは「無縁」と隣あわせと思える現状です。

介護制度が2000年施行されましたが、改定が何度とされ、この4月からも見直しされます。改定のたびに、その法の下に「くらす」ひとりひとりが、豊かに楽しく過ごすことから遠ざかっているように思われます。「お

たがいさま」の思いで立ち上がっている「たすけあいの会」をていねいにすすめていくことは、「協同っていいネ。」になるツールの一つと思われます。自分の住み慣れた所で、安心して心豊かに暮らす事を、おたがいさまですよネとつながりをつむいでいける事は、「真の協同」といえるのではないのでしょうか？ ひとりひとりの自立と豊かさのために「おたがいさま」が当たり前になるために成し得る「協同」とはと考えてみたいです。



三河懇談会に参加して

小川眞由美（コープあいち）



南北に広く海・山・川と自然に恵まれた三河地域での交流会は、座談会から始まって丸10年を迎えました。テーマは地域のくらし、福祉のこと、農産物などなど……。その地域に出向き、歴史や生活を土地のものをいただき、人と語りあい、多くの学びと体験で心が豊かになりました。また、生活の不便や山林の荒廃、海外に頼る食べ物やエネルギー、原発問題等もつと語

り合わないといけない課題もみつかりました。懇談会は地元の熱い思い、ちょっと難しいが勉強になる先生達の話やくらしの中からのおばちゃん達の体験など、いろいろな立場の人と語り合い、お互いを理解し、思いやれる大切な場です。この場で語り合う仲間を増やし、今後なにができるかを考えていきたいと思っています。

苦小牧へ

熊崎辰広(コープぎふ)

今年30才になる長男が、この4月から苦小牧高専に赴任することになりました。一昨年の3月博士(学術)の学位を受けたのですが、なかなか就職がきまらず非常勤講師の仕事の続けながらの就職活動の結果でした。

さて苦小牧へ、どのようなルートで行くか。飛行機で行くのが早くて楽なのですが、車がどうしても必要だということで、最終的に車で行くことにしました。あまり時間もとれないということで、高速道を乗り継いでいくことになりました。

マーチという小さな車に資料や本などおよそ二人がどうにか座れるだけのスペースの状態でのドライブです。座席を倒して寝れないというつらさ。30日の早朝5時家を出て、富加から高速道にはいり、中央道、長野道、上信越、北関東を経て東北道に、それから一路北をめざしての運転です。

これまで、長男とあまり向き合ってこなかったとい

う負い目がありました。

小学2、3年のころ二人で入った中華料理店では、あらためてすこし覇気のない長男の顔を確認するといった状況でした。そして6年生では、近くのお店でのプラモデルの万引きが発覚、また中学生ではいじめに会い一時不登校になるなど、不安な日々をすごしたのですが、その危機をすくってくれたのは一人の友人でした。

しらじらと明け染める空と風景を楽しみながら、およそ3時間ずつで交代しながら北上しました。途中、時間があれば東北の被災地を見ることも考えたのですが、その日の夜11時過ぎに青函フェリーの予約をしていたので、休むことなくおよそ30時間ほどかかって現地に到着、長男はもう絶対こんなドライブはしない、と愚痴をこぼしたのですが、この共通の体験が親子の距離を縮めてくれたようです。

場としての協同

仙田田鶴子(コープあいち)



協同する意味はどこにあるのだろうか。協同する事で得られる価値は何なのだろうか。日常の社会の中で、思いを同じくする者が、助け合い、支え合い手を組み合う。そして行動する。そこに意味があり価値がある。

私達は、温かい血の流れる人間として、どんな場面でも、どんな課題にも心を動かす事をいとわない。そんな人になりたいと願っています。しかし、いつも心にゆとりがある訳ではなく、気づいても知らない振りをする事

も、近づく事に恐れを感じてしまう場合もあります。そんな時に、手を差し出してくれたり、肩を叩いてくれたりする仲間がいると、安堵するでしょう。

協同するっていう事は、肩に力を入れ、こぶしをにぎり、大声で「世の中のため」なんてではなく、思いを同じくする仲間の中で、自分の役割を果たす。その行動の中で楽しさを語り合える、そんな感覚を持てる「協同っていいかも」。

自立と地域と協同と

田中義二(愛知書房)



近頃「暮らし・地域・自立・協同」が頭の中をグルグル回っている。例えば、食。冬にトマトを食べる暮らしが本当に必要なのか。そのために、農家は石油を大量に使う。例えば衣。化学繊維は安い、石油が原料。住も同じ。柱も壁も合成樹脂。これも石油。例えば、熱と光り。身の回りに溢れる太陽や水を捨てて電気を買う。これも石油が主。石油が暮らしを支配しているのだが、私たちは「豊かになった」と誇らしげにしてきた。

春の野菜や果物が顔見知りの農家から届く。綿と木綿や桑・蚕と絹。これを現代にふさわしく進化させられないのか。みんな切り捨てた。地域にある物を進化させようとせず、なかった物を、便利だ・安いと持ち込む。石

油を持ち込むために、「豊さ」の確保のためにどんなからくりがあるのか、考えようとしなかった。今、そのために、どれほどの国と民族と文化が苦難にあっているか、見えてきた。石油からの自立が必要ではないか。

自立が必要なのは他にもある。お金第一の思想からの自立。あの人たちの喜ぶトマトを作ろう、届けよう。おいしかったよ、とお礼を言おう。そんな地域の人間関係の輪。それが金で断ち切られた。金さえだせば安くて便利が手に入る。一人でも生きられる、と。これで本当にいいのか、地域は必要ないのか。では、どう自立する？だからこそ地域という思想、協同という思想が必要なのだ。と結論のみを書くしか、今は紙幅がない。

同心協力

牧原よし子(コープあいち)



心と身体の健康のために、太極拳を始めて15年になります。

当時私は、メニエール氏病や更年期障害で、医者通いをしていました。

好きで活動していた生協の事も、共同購入を利用するだけが続き、何かしなければと思っていた時に、蒲郡市の健康講座を回覧板で知りました。それが私と太極拳の出会いです。

生協に初めて出逢った時の様に、太極拳を舞う事で身体が健康になっていきました。そんな私の姿を見ていた夫や友達が、自分も一緒に習って今の健康を維持したい、との意思表示がありました。

それから6名の賛同者と共に教室作りをして行きました。

初めは西浦公民館に部屋を借り、代表者と会計を決めて発足しました。

今思えば生協で習い覚えた協同の力でした。

太極拳は競わない、参加している人たちの健康や幸福を願い練習をする。共に協力し合い練習できることを感謝することが大切です。

今は私も夫も師範免状を頂き、教室も西浦公民館、蒲郡市農協、西尾市津の平と3ヶ所になりました。

‘小さな草の根の協同’から

生協という協同組合の中にとっぴりつかっている私にとって、協同がわるいわけはありません。協同することは物理的な利益ばかりでなく、‘心’のつながり（絆）ができて、人生が豊かになるからです。私が今やっているボランティア活動も結局は協同です。例えば配食、それは小さな小さな協同ですが、大きくても小さくてもどんな協同であれ、相手を信頼し、尊重しない限り、協同はなりたちません。食事を献立づくりから材料の仕入れまでする調理の人、出来たお弁当を事務局のつくる配達

溝口弘子(ボランティアグループ月木会)



表にそって配る人、戻ってきた弁当箱を洗い、消毒する人、そして、私のような利用者とボランティアの調整を引き受けている事務局。お互いが相手を信頼しない限りこの仕事はなりたちません。そして忘れてはならないのは、お弁当を利用して下さる人、この人も協同の一員なのです。

そしてもう一つ、協同に加わっていない人への配慮も必要かと思います。

自由と協同

向井清史(名古屋市立大学大学院)



世界が近代化していく過程で「都市は人間を自由にする」という言葉が広く流布されました。確かに近代以前の農村共同体で生活してきた人にとって、お金さえあれば誰に遠慮することなく自由に選択、行動できるという社会の到来は大きな進歩であったでしょう。しかし、その後の資本主義の発展は、自由を獲得するために失ったことも大きいということが明らかになってくる過程だったともいえます。貧困や失業など、近代化が自由を奪う側面を持つことは誰の目にも明らかです。人が真の意味で自由になるためにはセーフティーネットが必要です。リスクが大き過ぎるとき、

人は自由な選択ができなくなるからです。セーフティーネットには多様なものがあるでしょう。第一義的には国や企業がそれを担うべきでしょうが、自立した市民として自助がなければ国や企業に完全におんぶしてもらうことになってしまいます。過度に依存すると、財政問題が生じセーフティーネットの維持を困難にします。先進国に生じている財政問題はこのことと大きく関係しています。だから、自由を守るために、自立した市民による連帯、協同による自助はなくてはならないものです。協同の輪を広げていきましょう。

くらしと協同

八木憲一郎 (コープあいち)



「私たちは、人と人がつながり、笑顔があふれ、信頼が広がる新しい社会の実現をめざします」という「日本の生協の2020年ビジョン」のアクションプラン1は、「ふだんのくらしへの役立ち」です。このアクションプラン1には、「正直・公開」の姿勢を貫き、組合員のくらしに貢献するために、事業組織として取り組むべき8つの行動課題が掲げられています。

生協の資料に「ふだんのくらし」という言葉がよく登場するようになって、3～4年になるでしょうか。この言葉を聞くと、私は「普通のくらし」という言葉を思い出し、同時に「健康で文化的な最低限度の生活（憲法第25条）」とか「人間らしいくらしの創造（生協の21世紀理念）」などのフレーズを連想します。

子どもの頃（1955年前後）のことです。多くの家庭では、味噌やしょうゆなどの調味料は量り売りで購入していました。私も1升ビンや5合ビンを持って醤油やソースを買いに行かされたものです。しかし、裕福な家庭には御用聞きのおじさんが来て、政治談話や世間話などし、時には病人の様子を心配しながら、

生活必需品を届けていました。生協で仕事をするようになり、この御用聞き制度が生協の運動と事業と組織運営の基礎をつくってきたというお話を、灘神戸生協（現コープこうべ）や洛北生協（現京都生協）、福島消費組合（現コープふくしま）などでお聞きしました。班共同購入とは違い、一軒一軒、一人ひとりの組合員が、それぞれ個別に利用する「個配」事業でしたが、生協への信頼や協同の意識は高く、組合員同士のつながりも相当強かったようです。相互扶助組織として、協同組合として、組合員・理事・職員がお互いにくらし・地域・協同を大切に考え、行動していることを教えていただいたのです。

そんなことをぼんやり考えていた4月4日の朝、地元新聞の「東三河歌壇」で見つけた、生協がくらしの中に溶け込んでいることを感じさせてくれた一首をご紹介します。

御用聞き来たりし頃を思ひをり
かたち変はりて今は生協

協同への思い

幸松孝太郎（地域と協同の研究センター理事）

広辞苑によると、協同とは「ともに心と力をあわせ、助けあって仕事をする。協心」、協働とは「協力して働くこと」、この定義から差異化すると、二人以上の者が事を行うもっとも広い意味が共同であり、特に心を合わせて助け合いながら事を行う場合に協同という言葉が用いられるようである。さらに、協働と協同とは極めて類似した概念でありながら、協同が心理的側面に重点をおいた表現であるのに対して、協働は働くという身体的な活動を強調したものといえる。

この研究センターの理事として、4年目になる。最初は、ほんとうに何をしている組織かわからなかった。理事会に参加しているうちに、だんだん理解できるようになったが、愛知・岐阜・三重の生協や農協などへ“心を合わせて助け合いながら取り組んでいるだろうか？”と自問することが多い。

理事になる前に、問題意識としてあったのは、地域社会の連帯感の喪失であり、地域経済の空洞化である。そ

れを地域住民の生活や暮らしの側から取り戻すには、どうすればいいのか。

協同組合は、地域社会を暮らしやすいものに、地域経済をより持続的で安定したものにするために活動する存在であったはずである。ことに生協や農業、医療などという生命の根源に深くかかわる協同組合の役割こそ重要であったはずである。ところが現実の生協や農協は、おしなべて、地域の生活を基盤で支える協同活動に弱体化の懸念が生じてきたように思う。

地域社会の暮らしを真に住民のものとするには、人々の関係をあらたな連携の輪で結び付けなければならない。そのためには、「新しい公」すなわち、協同組合やNPO、地域づくり組織を軸とする連携が期待されている。ほんとうに暮らしやすさの回復のためには、「協同」という視点は避けられないのである。

『今こそ、協同を問うべきと思います。』



生協の 組合員理事ゼミナールを 開催しました

編集文責：伊藤小友美



磯村隆樹さん

地域と協同の研究センターでは2010年度、2011年度に組合員理事ゼミナールを開講し、コープみえ、コープあいち、コープぎふ3生協の組合員理事全員（世話人以外）50名に受講していただきました。

今回は、その企画運営にあたってこられた世話人会座長の磯村隆樹さん（地域と協同の研究センター常任理事・コープあいち常務理事）にお話を伺いました。

Q：まず、組合員理事の学び合う場づくりの目的について教えてください。

磯村：①組合員の願いに応える理事会＝ボードづくりに向けて、くらしの実感、協働の担い手としての実感に根ざした組合員理事の固有の役割を果たすために、

「組合員理事の考え合い、学び合う」場づくりを進めて、そのエンパワーメントをつくり合い、理事の役割と使命を担える確信と誇りをつくり合う。②東海地域の4生協（2009年度当時）の組合員理事さんが互いに交流し合い、広い視点から生協運動における諸点を考え合い、学びあう価値を創造する。以上の2つを目的にしています。

Q：世話人会で大事にされてきた考え方についてもお話してください。

磯村：一方的な講義による教える座学ではなく、考え合う、研究し合う、学び合うという場をつくり、気づきと学びを相互に引き出し合うことを意図して進めたいと考えてきました。しかし、考える契機となる情報をお伝えしたり、得たり、またはある考え方を提示するという刺激となる資源の提供と獲得も合わせて行い、ともに考え合い、学び合う、研究し合うということを基本としてすすめました。世話人が事前準備や当日のファシリテーターも務めました。

Q：具体的なカリキュラムはどうなっていますか。

磯村：次の5つを学びの焦点として、5回（10時～15時開催）のゼミナールに取り組みました。以下は2011年度のカリキュラムです。2010年度とは若干順番を入れ替えました。

（1）自他の共感の世界をつくるコミュニケーションを学び合う

講義は日本福祉大学の池谷寿夫先生にお願いしました。内容は「コミュニケーション論」～人間社会におけるコミュニケーションの本質で、その後、コミュニケーション体験ゲームを行い、全体交流をしました。「相手の立場に立って話をするというのは、出来そうで意外と難しいものだと感じました。」

「聴く・受け止める・気づく・考えあう」ということが大切だとあらためて思いました。」などの感想が寄せられました。

（2）地域社会、くらしと生協、協働組織のあり方を考え合い、政策提案力を



育み合い、参加の場のデザインを研究し合う

グループで、KJ法・ブレインストーミング法を使って、事例研究を行いました。グループごとに、画期的なピースアクションの企画を考え合い、大いに盛り上がりしました。「企画立案をするのは楽しいことだと改めて確認しました。」「それは無理でしょう」、「予算が無い」、「それは生協らしくない」を言わないようにというのも良かった。柔軟な考え方を持つことの大切さを感じさせられました。」という感想が寄せられました。

(3) サーバント・リーダーシップを学び合う

理事の役割とサーバント・リーダーシップというテーマで、地域と協同の研究センターの兼子厚之さんに講義をしていただきました。「理事は組合員の代表ではない、地域の代表でもない。」「大いなるアマチュアであることに価値がある。肩の力を抜いて自分らしくあってほしい。」という話に、「気持ちが楽になった」「引く張るリーダーではなくて支えるリーダーになりたい」という感想が寄せられました。ミニ・シンポジウムでは、明るく楽しく元気に活動や仕事をされている紅谷昭代さん（コープぎふ：副理事長）、大橋美由紀さん（コープあいち：副理事長）、小西一平さん（コープみえ：共同購入事業部部長）のお話があり、グループで考え合いました。

(4) 生協運動の使命と可能性を考え合い、その存在価値への確信を持ち合う。

コープあいち副理事長の八木憲一郎さんの「生協運動の価値と可能性」と題した講義のあと、グループ研究で、生協とは何か、そしてその可能性を考え、深め合いました。「生協とは何かを考えるということは 人間とは 暮らしとは 命とは何かを考えることである、知り学び考えるそして語り合うことであるというお話が、大変印象に残りました。」という感想が寄せられました。

(5) 生協人、市民としての生き方を育み合う

明治大学教授の中川雄一郎先生の「シチズンシップと生協運動への期待」と題した講義と、コープあいち学識理事の仙田鶴子さんの「私の生き方と生協運動」という講演のあと、グループごとに交流し、おひとりずつ「私はこうしたい」というテーマで1分間のスピーチを行いました。最後に修了書の授与がありました。

Q：参加された理事のみなさんはどのように思われたのでしょうか。

磯村：全体を通してさまざまな感想が寄せられていますが、一部ご紹介します。

- ・葛藤しながら活動をしている私にとって「アサーティブコミュニケーション」「サーバント・リーダーシップ」「シチズンシップ」は勉強になりました。いつも新鮮な気持ちで学び続けたいと思います。
- ・初めは受講するのがしんどいかなと思ってたゼミナールも、更に続けられればと思うほどでした。
- ・考える手法を学び、受けとめ応える心を学び、理事としての在り方を学びました。楽しく学びあい、チャンスを生かし、学んだ事を理事会の中で生かしていきたいです。出会えた皆様に感謝しています。
- ・他の生協の理事さんとグループディスカッションで話し合えたことがとてもプラスになり、良かったと思います。

Q：一期目・二期目の受講生の合同での交流会も開催されましたね。いかがでしたか。

磯村：ゆっくり時間を気にせず、フリーに話せる場がほしいという声に答えて、交流会を開催しました。終了後、「発見やつながりが深まった」「他の生協の取り組みや様子を聞くことができ参考になった」「本音を出し合えてプラスに感じた」などの感想も寄せられています。当初予定していなかった交流会ですが、世話人会では、開催してよかったとのまとめを行いました。2012年度以降のゼミナールについても、検討をしているところです。有意義な学びの場を引き続き追求したいと思っています。



組合員理事ゼミナールは、世話人会のメンバーで、2009年度から企画構想を検討し、組み立てから実施までを担ってきました。メンバーは3生協より組合員理事各2名、機関運営担当責任者の職員各1名と、座長です。この3年間を振り返り、世話人でコープぎふ副理事長の紅谷昭代さんから以下の寄稿をいただきました。ご紹介させていただきます。

紅谷 昭代（組合員理事ゼミナール世話人・コープぎふ副理事長）

当初、「組合員ゼミナールへの期待」として掲げた言葉は次のようなものでした。

あなたがいるから わたしもいる 共に考え、話し、笑い、悩み、 うずくまり、激怒し、
慈しみとつき進む勇気を忘れずに、 ここに集う人を信じて、 広がる世界に身を委ねよう！

今3年間を振り返って心に浮かぶ言葉は、爾今（じこん）。

私はこの言葉を、“生きている今をひたむきに生きよう！”と捉えている。その背景にあるのが、女優杉村春子が演じる「女の一生」の中の布引けいの名セリフ。“だれが選んでくれたんでもない、自分で歩き出した道ですもの”。20歳の頃にこの舞台に接し、それ以来その時の感動がそのまま私の人生訓となった模様だ。

生活協同組合の役員として長きにわたって私を支えてくれたのが『協同組合のアイデンティティに関するICA声明』。定義と価値と原則は民主主義に貫かれ、人々や社会に希望と勇気を与え続けてきた。その時々々の課題を解決するためにはどの原則から考えたら解決の糸口が見つかるのかを指し示してくれる。

組合員ゼミナールは、ともすれば忘れがちになる生協運動と市民としての生き方をうまくつなぎ合わせ、理事会が決して見失ってはいけない大切なことがらを、一人一人の参加者がつかみ取ったことに大きな意義があると思っている。自分もその中にいてとても幸せでした。ありがとうございました。

第6回生協職員の仕事を語る会 開催レポート**私のくらしの中の生協商品！**

2012年1月29日（日）、ワークライフプラザれある大会議室に於いて、研究フォーラム職員の仕事を考える世話人会主催で、第6回生協職員の仕事を語る会「私のくらしの中の生協商品！」を開催しました。今回のゲストスピーカーは、コープあいち2人、コープぎふ1人、コープみえ1人で計4人の組合員さんに参加いただき、27人の参加者で、インタビュアーも世話人の組合員が行い、いろいろお話いただきました。その一部をご紹介します。（文責：大島三津夫）

1. 自己紹介

インタビュアー：コープあいち組合員 中村 依子（なかむら よりこ）さん

ゲスト：コープぎふ組合員 國江 雅子（くにえ まさこ）さん

コープあいち組合員 神谷 敦子（かみや あつこ）さん

コープあいち組合員 須小 真衣（すこ まい）さん

コープみえ組合員 清水 尚子（しみず なおこ）さん

インタビュアー 中村さん：今回インタビュアーをさせていただきます、コープあいちの中村と申します。よろしくお願いします。座って自由におしゃべりという形で進めますので宜しくお願いします。

生協のこういうところ好きということを一言いっていただき、自己紹介をお願いします。

清水さん：コープみえから来ました清水尚子です。私は1980年に生協に入りまして、年数は多いのですが、最近は品物が増えすぎて、チラシを見ているだけで疲れてしまいます。例えば、雑貨のチラシでは、品物が重なって企画があったり、同じような商品でも価格が違っていたり、娘も生協に入っていますが、勤めているので、チラシを見る時間がなくて、いい加減な注文しかできないと言っていました。この辺は改善されるといいなと思います。

須小さん：コープあいちを利用させてもらっています須小真衣といいます。私は生協に入って1年経っていません。まだ分からないことが一杯です。生協のよいところは、楽なところですよ。私は1歳3ヶ月の子どもがいますが、子どもを抱っこし、おんぶしながら買い物するのは結構大変で、生協が宅配してくれるので本当に楽で、「最近、買い物行っていないな！」と感じています。宜しくお願いします。

神谷さん：コープあいちから来ました、神谷敦子です。宜しくお願いします。私も入って1年少々です。生協商品も食べていないものがあり、分からないことも多いのですが、家族から「おいしいね」と言われた食品が、生協商品で多くあり「よかった」と思っています。魚も骨が無いものが多くあり、「お年寄りにも便利かな」「魚嫌いの子どもにはいいかな」と思います。また商品はいろいろ検査されているので、「安心して食べられる」と思います。

國江さん：コープぎふから参りました、國江雅子です。生協のいいところは、玄関先まで運んでくれることです。結婚して社宅に入り、その後1週間か2週間で生協と出会う、もう20年経ちます。子どもたちは「生協の商品で育った」と言っても、過言ではないほどです。買い物にも行かず、生協さんに届けていただけるものを食べて、20年経ちました。

2. 共同購入の荷受の場では？

インタビュアー 中村さん：共同購入の方々は、今でも荷受けの場で、ワイワイとお話をされているのかと思います。どういう情報交換をされていますか。

神谷さん：チラシが多くて、このところ必要なものだけを購入しています。すごくもったいないなと思います。たくさんある缶詰等はみんなで分け合って注文したり、利用した商品は、「これおいしいね」とすすめて合ったりしています。

インタビュアー 中村さん：國江さんはどうですか。

國江さん：子どもが小さい時からスタートしている班で、子どもが小さいころは「これ子どもが良く噛むよ」とか、「喜んでいたよ」とか話していました。子どもたちが高校生になって「これはお弁当に入れておいしかったよ」とか、「子どもが喜んでいたよ」と教え合っています。もう一つ、地域の中学校でお弁当の日が始まり、子どもたちに「どうやってお弁当をつくらせるか」という話が生協の班で出て、食品だけでなく「道具は欲しいよね」とか、チラシの中に「ゆで卵の切り方」とかいう本がたまたま入っていて、それを買われた方があったので、みんなでコ



中村さん



須小さん



神谷さん

ピーして見せあったりしました。何冊も買わないところがグループです。コピーをとって、お弁当の日に生かさせていただいたりしています。

インタビュー 中村さん：お弁当の日とは、子どもさんが、自分でお弁当をつくって持っていく日ということですか？

國江さん：お弁当の日とは、子どもが自分で計画を立てて、買い物をしたり、冷蔵庫の中のものを使って、自分でお弁当をつくっていく日です。子どもたちで、包丁を持ったことのないような男の子も、自分で料理をしなければならないので、例えば「初めての包丁」が商品にありましたが、「ここまではいらないよね？」とか言いながら、どこからどうさせようかと、同じ中学生の子どもがいる組合員のお母さんが4～5人いまして、そんな話や「あの商品は載っていてよかった」とか話しています。

須小さん：私は、姉の家族が生協に入っていて、よく生協商品を食べさせてもらいました。私が入る時、妹も誘って加入し、家族で生協の商品を食べ合っています。地域のママ友達も、子どもが生まれてから生協に入った友達が結構いまして、会話の中で「これ離乳食に使いたいわ！」等、話しています。

3. 生協商品の安心感はどこからくる？

インタビュー 中村さん：みなさんのお話を聞いていると、生協商品は安心ということですが、その安心感は、どこから来るのでしょうか？



清水さん

清水さん：以前は、商品案内の中に、成分表示とか産地の表示はなかったと思いますが、最近は丁寧に書いてあります。以前は班で共同購入を利用していましたので、みなさん年代もいろいろで、情報交換していました。中には、スーパーにも行っている人がいて、食べ比べたりして「スーパーの商品はダメだった」という声を聞いて、生協の商品のよさを実感していました。主人はずっと生協の商品ばかりで生活してきて、牛乳を変えると「あれ、これ牛乳違う」と言います。

インタビュー 中村さん：今はスーパーでも、ピンクじゃないウインナーも置いてありますね。スーパーに置いてある商品も変わってきました。須小さんはまだ入って短いですが、安心だからでなく便利だからですか？

須小さん：私は安易に安心と思っていますね。ただ最近では、放射能の問題があった時とか、そういう情報も載っているの、見るようになり、子どもが寝てから、じっくり商品案内を見るようになりました。子どもと一緒に見ようとすると全部破ってしまいますので。

インタビュー 中村さん：スーパーの商品と生協の商品は、違うと思われますか、それとも便利だからですか。



國江さん

國江さん：私も須小さんと一緒に、あらためて聞かれると、どうして安心しているんだろうと思います。結婚して何も知らないで埼玉に嫁ぎ、その社宅にいたベテランの主婦の方が「安心よ」「安全よ」と言われて、20年間安心で安全だと思って、生協を使っています。最初の出会い方次第だと思うんです。たまたま私を生協に誘って下さった方が、お子さんが二人いて、お二人ともアトピーで、知らずに食べると反応が出るというお子さんをお持ちの方が、「生協の商品は食べさせられる」「生協だからやっつけいける」と言われ、「これから主婦になったのだから、こんなことも考えるんだよ」とお誘いされました。「そうか！」と、その方を主婦の先輩として信頼し、そういう風に生協と出会っているので、20年間、埼玉のお隣の奥さんの言われたことを信じて、安心と思ってきました。その方は、私の子どもにアレルギーが出た時も、いろいろ教えてくれて、食べるものも「このパスタだといいよ」と教わって、

生協の横のつながりから安心と思ってきたということだと思います。先輩の主婦から言われ、「いいんだ」という出会い方次第で、20年間信じて食べてきました。商品も、豆腐が足りなくなり、国産木綿の豆腐を選んで、スーパーで買ってきて、その日の麻婆豆腐はおいしくないと言われ、鍋の豆腐も、生協でないと、中に残ってしまいます。子どもたちは、もう食べなれた感触があり、他で買ったものは合いません。長いこと掛かりましたが、自分で安心だと思えるようになってきました。

インタビュー 中村さん：みんなが関わっているとか仲間が関わっていることは大きなことかもしれませんね。

※報告集を発行予定です。ご希望の方は事務局までご一報ください。

巻頭言 新しい「暮らし」像を求めて 小木曾洋司	1-2
特集 協同っていいかも	2-5
いきいき笑顔がいっぱい!! 生協の組合員理事ゼミナールを開催しました	5-6
第6回生協職員の仕事を語る会開催レポート	7-8

お詫びと訂正

先号100号9ページ、下から7段目、
生物学的効果比(RDE)は⇒(RBE : Relative Biological Effectiveness)の間違いでした。お詫びして訂正します。

2012年4月25日(偶数月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 川崎直巳

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kvodo.net/>